



## 宣教師と KG ファイターズ (前編)

武 田 建

### ★ 甲子園ボウル初勝利の陰にポーター先生

1948年頃だったのだろうか。私がまだ高等部2年生の頃だった。中学部と高等部に、宣教師見習いというか、アメリカやカナダの大学を出たばかりの青年男女が、宣教師の助手のような形で日本に送られてきた。彼らは3年間日本に滞在するので、通称 J3 (ジェイ・スリー) と呼ばれていた。関西学院中学部にはウィリアム・ポーター(William Donald Porter)先生が、彼の相棒のキース・ジョンソン(Keith Willis Johnson)先生は高等部だった。ポーターさんは、カリフォルニア州出身者らしく、何事にも明るく積極的な人だった。フットボールが大好きで、出来たばかりの中学部のタッチフットボール部員たちとキャッチボールをし、大学のアメリカン・フットボール部の練習を見に来て下さった。

それまで、関学の大学チームに全くアメリカ人がかかわっていなかったわけではない。上級生の大学部員たちが「ミスター・ロー」と呼ぶ米軍兵士がときどき上ヶ原のキャンパスに来て、いろんなプレーを教えてくれていたようだ。残念ながら、私はこの兵隊さんコーチにお目にかかったことはなかった。だが、ミスター・ローが教えたプレーを上級生が真似して言っているのを何度も耳にしていた。もっとも鮮明に覚えているのは、フォワードパス・ラテラルというプレーだ。先輩たちはそれを「フォワード」と呼んでいた。フォワードパスだから、いったんボールを前に投げ、そのパスを受ける選手はフックパスを捕るように、投げる選手の方を向き、止まってボールを受ける。次にラテラルだから、斜め横後ろから来る味方にトスする。まず前(フォワード)パスを受け、次に後方から走って来る味方にトス(ラテラル・パス)をするわけだ。

当時、アメリカ本国の多くの大学や高校のチームは、シングル・ウイングバックといって、今、関西学院大学が使っているような体型を使っていた。このフォーメーションは、センターの真後ろ5ヤードのところにもっと足の速い選手を置いた。この選手は、昔も今も、テイルバックと呼ばれる走り屋さんだ。その斜め前に、今はクォーターバック(昔は大きくて当たれる選手)がいて、彼がセンターから直接ボールを貰うと、斜め後ろのテイルバックに手渡ししたり、渡すと見せて自分でボールを持って走ったり、前に投げたりしていた。関学の大学チームは、このフォーメーションを1940年代の終わりから1952年頃まで使っていた。センターの後ろに、斜めに並ぶバックスの一番前は、卒業後、神戸新聞の記者を経て関学大の体育教員になった米田満先生、二番目には、やはり体育の高橋治男先生、そして、一番後ろのテイルバックには、天才ランナー、投げてよし、走ってよしの徳永義雄さんがいて、走って、投げて、時には高橋さんからのパスを受けていた。

1949年、関学が初めて甲子園ボウルに出た時、大学1年生の徳永さんの大活躍もあって、25対7で慶應大学に勝ち、初めて日本の王者についた。その頃は今のXリーグなんかなかったから、甲子園で勝てば日本の王者だった。この大勝利の陰には、ポーター先生とジョンソン先生がおられた。何処で手に入れたのか、立派な牛肉をたくさん提供し、試合の数日前に外国人住宅ですき焼パーティーを開いて私たちを励まして下さった。それだけではない。今でもリーグ戦の決勝や甲子園ボウルの試合前、選手たちがグラウンドで円陣を組んで歌う fight song (部歌) “Fight on, Kwansai” は、ポーター先生が兄上に頼んで、関学チームのために作詞作曲して送



って戴いたものだ（兄上が作曲、その夫人が作詞。これが届いたのも、1949年の甲子園ボウル直前だった）。だから、関学アメリカン・フットボールの部歌は英語なのだ！

話は相前後するが、戦後、関学チームではフットボールの防具が極度に不足していた。今のように、米国からの輸入は許されない時代だった。日本では、企業も一般人も、ドルの割り当てはゼロ。つまり、防具を輸入するにもドルがなかったのだ。時には、占領軍の米軍キャンプから防具を持ち出して売りさばく不心得者がいたのだろう。こうした米兵を、街の販売店は「もっと沢山持ってこい。いくらでも買ってやる」とそそのかしたに違いない。こうして、日本の大学チームは、かろうじて防具をかき集め、練習や試合をやっていた。

でも、関西学院はキリスト教主義の学校だ。闇市で売っている盗品まがいの防具を買うには抵抗があったのだろう。だから、普段は防具をつけずに練習し、試合の時はたくさん防具を持つ京都大学から借りていたのだ。

京大チームのマネージャーは、戦後、戦災孤児を収容していた「エリザベス・サンダース・ホーム」を運営していた澤田美喜さん（元初代国連大使夫人）のご子息だったから、米国育ちで英語が自由だった。どうやって手に入れたのか知らないが、とにかく京大にはアメリカ製の防具がいっぱいあった！その頃、高校2年生で、大学チームの最年少部員だった私は、試合の前日になると、大学生マネージャーに連れられ、京大農学部のグラウンドへ防具を借りに行っていたことを思い出す。

ところで、関学はいったいつまで京大から防具を借りて試合をしていたのだ？ どうぞ、ご心配なく。それから間もなく、名前は伏せるが、関学の若い宣教師見習いたちが、伊丹の飛行場を占領している米軍キャンプに行き、防具を車一杯持ち帰って来た。ヘルメットには、伊丹基地のチームとは違った色のスプレーがかけられていたそうだ。

毎日、防具をつけて練習ができるようになった関学チームが、1949年（第4回）と50年（第5回）に、関東の覇者、慶應義塾大学を破って甲子園ボウル連覇を果たした陰には、こうした多くの人たちの汗と涙、必死の努力、そして密かな笑いがあったのだ。

## ★ 天からの「贈り者」トム・ハリス宣教師

1966年の春だった。二人目の子どもが生まれるので、アパートの敷金を父親にせびって、隣の部屋の会話が筒抜けの文化住宅から、部屋まで靴を持って上がるアパートに引っ越した。ある日、トム・ハリス（Thomas J. Harris）という大きなアメリカ人の男が突然訪ねてきた。仁川で開業した杉本内科は英語が通じると聞いたので、風邪の治療に医院を訪ねた。すると、風邪のことは棚に上げ、「近所に住む武田という男の処へ行け」と医師から言われたのでやってきたと言う。

このハリスさん、ミシガン州の西にあるホープ・カレッジという小さな大学を卒業後、ニューヨークの神学校へ行き牧師になった。彼は、神学校時代から港湾労働者に宣教する仕事がしたくて、ミッシヨナリーとして日本にやって来た。しかし、自分はどんなにあがいても、努力しても、日本語をマスターできない。そこで、港湾労働者への伝道活動はあきらめ、残りの任期を関西学院大学商学部でミッシヨナリー・ティーチャーとして英会話を教えることにしたと言う。私とチームにとって、この人物はまさに天からの「贈り者」であった。「あんた、アメリカの大学でフットボールをやったんか？ この春から関学へ宣教師としてくるんやな？ 俺は社会学部で教えているが、フットボールのコーチもしている。風邪が治ったら、一緒にコーチしよう」。「まず、杉本先生の薬を飲んで風邪を治せ。選手にうつしたら大変や。そうそう、今度の日曜日、ここで試合をするから、時間があれば見に来てくれ」と言っていた。

試合当日、ふと見ると、我々のベンチのすぐ後ろにハリスさんが立っているではないか。「この男、フットボールが相当好きやな！」

この頃、彼は失意のどん底にあったと思う。長年、夢に見た日本の港湾労働者への伝道にやって来た。だが、日本語という「けったいな」言葉のために伝道を諦め、ABCに毛の生えた初歩的英会話を大学生に教えるという選択をせざるを得なかったのだ。そんな彼にとって、子どもの時から大学を出るまでや

ってきたフットボールを通して、日本の若者になにかをやれるという希望が湧いてこようとしていたのである。

私は彼をベンチに招き、私と一緒に試合を見るよう頼んだ。ここで告白しておくが、当時の私は鬼のようなコーチだった。怒鳴って、叱って、大声でわめき、ののしり、最低最悪の人間だった。試合が終わって、私が選手にお説教をし、選手を怒鳴り散らしている間、彼は黙ってベンチのすみに立って見ていた。えらいことをした、彼はあきれて帰ってしまうかもしれない。そう思いながらも、試合後、下手なプレーをした選手には懲罰的に、拙いプレーをしたところをやり直す練習を強要する私を、彼は黙って見ていた。

春休みが終わり、大学の授業が始まるまでに、ハリス家は関学内の宣教師館に引っ越してきた。なんと、昔ポーターさん達が住んでいた一番館ではないか。ハリス家には、ピーターとポールという男の子2人と、関学に住んでいる間に生まれたキムという女の子の3人の子どもがいた。上の2人は、ちょうど我が家の丈（ジョー）や恵（ケイ）と同じ年であった。商社勤めで、日曜日だけコーチに来る木谷直行さんと例の杉本ドクターのお宅にも、同じ年ごろの子どもが2人いた。

日曜日には、男どもはグラウンドへ行って好きなフットボールにうつつを抜かし、女性軍は宣教師館の広々とした庭で子どもたちを遊ばせるのが行事となった。練習が終わって男どもが帰ってくると、子どもの遊びは一変して怪獣ごっこになる。その頃、日本中の子どもたちはみんなウルトラマン病にかかっていた。だから、子どもを掴まえ、食べてしまう怪獣がいなくては遊びにならない。ある時、ハリス家に着いた私は、グラウンドで怒鳴りすぎたのだろう、水かお茶を飲んで渴きを癒やしていた。すかさず、ピーターが来てこう言った。「ケン、早く怪獣になってよ！」

## ★ 攻守両面のハリス・コーチ

私は、ヘッドコーチとか監督であったが、フットボールの全ての知識を持ち合わせていたわけではない。学生時代から攻撃専門の選手で、守備のプレーをしたことがない。相手の守備を知らなければ、何処が強いところか、何処が弱いところか、見破ることが出来ない。だから、ハリス・コーチのような守備の専門家が必要だった。さらに、彼は攻撃のラインの経験もあった。つまり現役時代、攻守両面（リャンメン）の選手だったのだ。ハリスさんは、守備だけではなく、攻撃のコーチも出来た。関学チームにとって、その存在は実に大きかった。

ハリス・コーチは熱心で、精力的にチームを指導し、結構良い攻撃ラインと守備チームを作り上げてくれた。当時は人材難の関学だから、守備専門とか攻撃専門といった贅沢は許されない。選手の相当数は攻守兼用で頑張ってくれた。しかし、甲子園ボウルでは、あの篠竹幹夫監督率いる日大に40対12で完敗してしまった。

それから3週間後、ライスボウルである。その頃は、東西大学選抜軍というオールスター戦だった。東軍は、篠竹日大に早慶明法から一人か二人ずつ加わった、正に東京オールスターズである。これは手ごわい。ハリス・コーチもお手上げだった。

そこで、数年前、久保田秋夫先生（1965年に、特別研究生として関西学院に来られた）というハワイのコーチから習った守備をやってみようとハリスさんを説得してみた。要するに、東京の攻撃チームがスクリメージラインについての途端、関西の守備体型を変えたのである。それも幾つかの体型へ変更した。時には、第一線だけでなく、第二線や第三線まで変化させた。こんな単純な変化だが、オールスター戦である。所詮、寄せ集めチームだ。混乱が混乱を呼び、東京チームの攻守は支離滅裂になってしまった。

私が担当する攻撃は、どうせ走っても、あの強い関東には進めない。QBの奥井捷弘に、「パスを投げまくれ」と言っておいた。どうせ走れないのなら、ランニングバックはいらない。1名で十分だ。その代わり、ボールを受ける役は4人に増やそう。関西には、ボールを受ける選手は大勢いる。関学の外、京大、関大、同大と、次々に投入した。簡単なパスだが、数種類有効なものがあった。それを投げまくった。外側にいたレシーバーがまっすぐ行って、フックして内側を向き、内側のレシーバーが斜め外に浅く走るコースがその日の稼ぎ頭だった。前半が終わって、20対7ぐらいのスコアだったろう。後半は

そうはゆかない。東京だつて、対策を考えてくる。後半は、ときどき走ろう。ランニングプレーがなくて、ふてくされているボックスに「前半はパスで餌を撒いておいたから、後半はパスを1回投げたら1回走るぞ」と、ハッパをかけた。その結果、奇跡的に逃げ込むことが出来た(34対30)。

次の週、関東・関西オールスターをもとにした全日本学生が、平和台返還を記念し、九州の米軍選抜チームと戦った(第1回平和台ボウル)。

日本側は、まず日大が単独チームで出て、タッチダウンを2つか3つ取ってくれた。満を持して関学チームの登場である。だが、1週間前のライスボウルの勢いはどこへやら。関学の攻撃陣は、前へ進むよりも後ろへ進むことが多かった。「篠竹先生、早く日大を出してください!」と頼む私に、「まだ、まだ!」と余裕の口ぶりの日大篠竹監督だった。

ライスボウルで負けたのは、オールスターだったからだ、という過信を篠竹さんに差し上げることが出来たのがこの試合の収穫だった。そして、ハリス・コーチのいない関学守備陣は張り子のトラだということも分かった。

春が来た。私は、夏から古巣のデトロイトのメリルパーマー研究所の心理療法クリニックへ、一家を上げて研修に行くことになっていた(1966年9月~67年8月)。秋の本格的なシーズンに不在をすることは申し訳ないが、最初の留学から帰国して5年。勉強や講義よりも、フットボールに時間と労力を注いできた自分に対する自己批判があった。もう一度勉強をしに米国へ行きたい。だが、自分がいなかったら関学のフットボールはどうなるのかという不安もあった。それを解消できたのは、ハリス・コーチの存在だった。それに、徳永監督とコーチ陣も2年目だった。監督、コーチ、選手間の強い人間関係、キャプテンの瀧君の成長と抜群のリーダーシップ。「留学するなら今だ!」と、私は思った。

私の名前はケンである。漢字で書くと「建」だ。人偏はついていない。人呼んで「人でなしのケン」だった。狂気のような私の留学を喜んだ選手も多かったに違いない。

米国滞在中、毎週手紙を交換する徳永さんから、ハリスさんの熱心なコーチ振りが送られてきた。1967年、関西リーグでは圧勝の連続だった。チームが目指したのは、甲子園制覇だけだった。あの篠竹日大になんと31対12と圧勝した。ハリスさんから長い手紙が来た。シーズンを振り返って、勝因を挙げ、一生忘れられない経験だったと書いてあった。「良かった!」。ハリス・コーチに、学生日本一というお土産を持ってアメリカに帰って貰える。

帰国後、ハリスさんはニュージャージー州で牧師となった。私がお後、何度目かの留学でテンプル大学の精神科で訓練を受けているとき、家に泊めて戴いた。関学時代と違って、すっかり牧師生活が板についた感じであった。その後、彼はコロラド州のデンバーに移った。3人の子ども達は全員優秀な成績で大学を卒業し、それぞれの専門領域で活躍している。もちろん、今はハリス先生も牧師のお仕事から引退なさった。だが若き日の2年間(1966年4月~68年3月)、関西学院の一番館に住み、クレイジーな日本人コーチと共にチームを指導した1年半、さぞ大変だったことだろう。しかし、彼と奥さんのバーバラさんにとって、関西学院の思い出といえば、まずフットボールではないだろうか。そして、私達一家にとって、ハリス家は日本国内のアメリカであった。アメリカを身近な国にしてくれた貴重な経験だった。

【関西学院大学名誉教授、元理事長、元学長】



山田文隆さん所蔵  
(51番、右から3人目)